

矢部川水系河川整備基本方針 の 変 更 に つ い て

平成26年9月29日

国土交通省 九州地方整備局

筑後川河川事務所

- ・平成24年7月の九州豪雨による洪水では、堤防決壊等により甚大な被害が生じた。
- ・今回、矢部川水系河川整備基本方針について、次の変更を行う。

<変更の概要>

- ・平成24年7月の洪水を踏まえた、基本高水のピーク流量や計画高水流量の変更等

<河川整備基本方針本文の変更箇所>

- ①平成24年7月の九州豪雨災害の記述を追加
(1. (1)流域及び河川の概要)
- ②今後の河川整備の方針に関する記述を追加等
(1. (2)河川の総合的な保全と利用に関する基本方針 ア 災害の発生の防止又は軽減 ウ 河川環境の整備と保全)
- ③基本高水のピーク流量、主要な地点における計画高水流量の変更等
(2. (1)基本高水並びにその河道及び洪水調節施設への配分に関する事項、(2)主要な地点における計画高水流量に関する事項)
- ④その他(市町村合併に伴う流域内市町村数の修正等)
(1. (1)流域及び河川の概要 等)

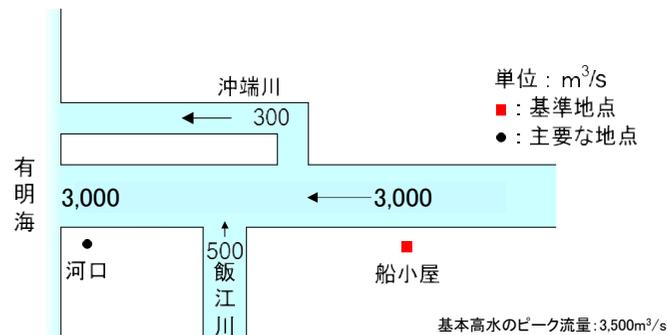
基本高水のピーク流量等の変更について

- 計画規模は、平成19年現基本方針策定時と同様の1/100とした。
- 対象降雨の降雨量は昭和28年から平成24年までの降雨を確率処理し、232mm/9hから249mm/9hに変更した。
- 基本高水のピーク流量は、総合判断の結果、3,500m³/sから4,500m³/sに変更した。
- 計画高水流量は、3,000m³/sを3,700m³/sとし、既設日向神ダムの有効活用及び新たな洪水調節施設により800m³/sを調節することとした。

現行の基本高水の概要

矢部川（船小屋）	
計画規模	1/100相当
対象降雨の降雨量	232mm/9時間 (船小屋上流域平均)
基本高水のピーク流量	3,500m ³ /s
計画高水流量	3,000m ³ /s

工実策定以降、計画を変更するような出水は発生しておらず各種手法による検討を総合的に判断し、基本高水のピーク流量を3,500m³/sとする

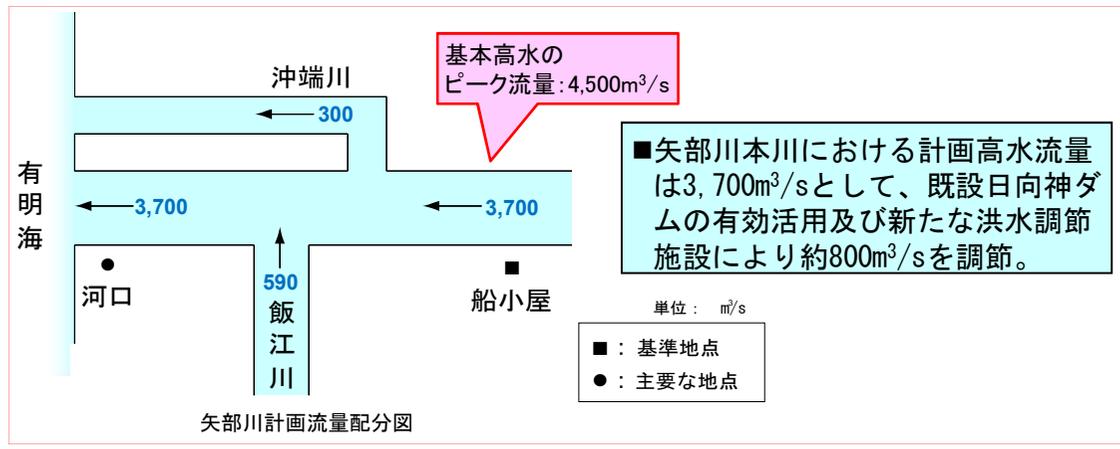


矢部川計画流量配分図

今回の基本高水の概要

矢部川（船小屋）	
計画規模	1/100相当
対象降雨の降雨量	249mm/9時間 (船小屋上流域平均)
基本高水のピーク流量	4,500m ³ /s
計画高水流量	3,700m ³ /s

既定計画策定以降、基本高水のピーク流量を大幅に超過する洪水が発生したため、各種手法による検討を総合的に判断し、基本高水のピーク流量を4,500m³/sとする



■ 矢部川本川における計画高水流量は3,700m³/sとして、既設日向神ダムの有効活用及び新たな洪水調節施設により約800m³/sを調節。

基本高水のピーク流量等の変更について

- 計画高水流量は、社会的影響等を考慮し3,700m³/sとする。
- 河道計画は主に下流区間の河道内の河積確保を行うことで流下能力を向上させる。

コントロールポイント

■ 浦島橋（4k800地点）架替事業が実施中（H20～）であるなか、3,700m³/s（船小屋地点流量）を超過する流量についてHWL以下にて流下させるためには、下流から約1km程度の引堤、西鉄鉄橋の架替と浦島橋の再架替が必要となり社会的影響が大きい。

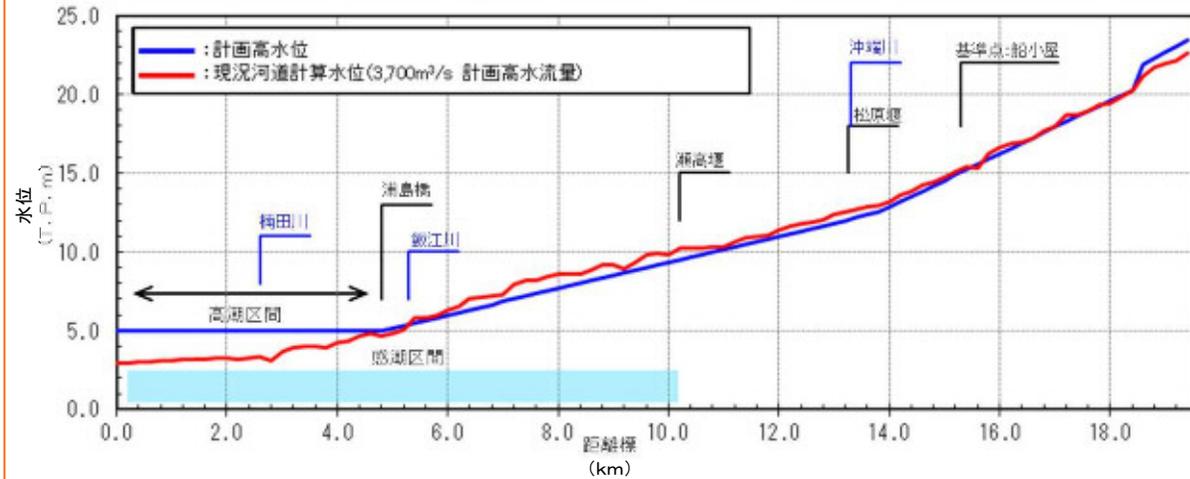


3,700m³/sを超過する流量を流下させるためには左岸4k200下流側から引堤を行い河積を確保する必要がある



矢部川現況河道水位縦断面図

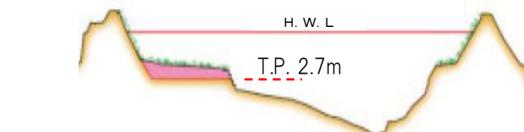
■ 飯江川合流点から上流において河道が狭くなっているため水位が上昇。



本川河道計画の考え方

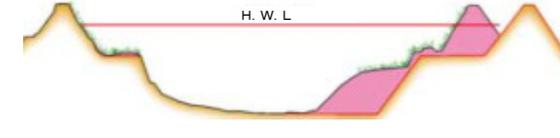
■ 高水敷盤下げ、引堤、河岸掘削、樹木伐開を行うことで河積を確保する。

①高水敷盤下げ



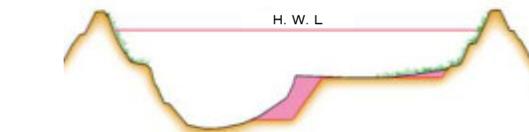
感潮区間の高水敷において、盤下げ可能な箇所はT.P.2.7m(期望平均満潮位2.65≒2.7m)を上限値とした盤下げを実施する。

②引堤



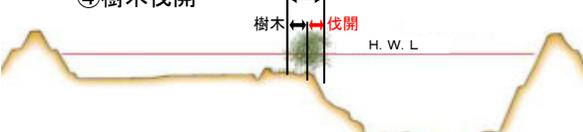
社会的影響を鑑み、効率的な引堤を実施する。

③河岸掘削



平面形状を十分に考慮し、河岸掘削を実施する。感潮区間においては高水敷盤下げで河積を確保できない箇所について実施することとし、掘削後のガタ土の動向に十分注意する。

④樹木伐開



計画的な樹木伐開を実施する。